



◎1925（大正14）年、松山美善女学校として開校、48年に松山女子商業高校、68年に聖カタリナ女子高校に改称。2012年度に総合学科を設置、16年度に男女共学となり、現校名に改称した。校訓は「誠実・高潔・奉仕」。ICT教育、グローバル教育などの改革を推進中。

設立

1925(大正14)年

形態

全日制／普通科・総合学科・看護科／共学

生徒数

約1130人

2016年度進路実績(現浪計)

国公立大は、岡山大、広島大、愛媛大、高知大、北九州市立大などに9人が合格。私立大は、早稲田大、立命館大、関西大、関西学院大、松山大などに延べ229人が合格。短大、専門学校、専攻科進学102人。就職は、67人。

住所

〒790-8557  
愛媛県松山市藤原町468番地

電話

089-933-3291

Web Site

<http://www.catalina.ed.jp/>

愛媛県・私立

聖カタリナ学園高校

学校改革

# 学校の一体感を醸成し、 学び直しとICT活用で 教育力を高める

変革のステップ

背景

◎生徒数が減少して各学科の規模が小さくなったことを受け、3学科が連携し、学校としての一体感を出すことが課題に

STEP 1

実践

◎学科を超えて、学力を測る共通指標を設定。学び直しやICTの活用による教育力向上を図る

STEP 2

成果

◎2016年度の高校受験者数が前年度の約2倍に増加。教師の意欲が高まり、学校の一体感や学年団の団結も強化される

STEP 3

生徒減を機に、客観的な学力把握と  
進路指導の体系化を推進

愛媛県松山市の中心部に位置する聖カタリナ学園高校は、商業系の女学校を前身とするカトリック系ミッションスクールだ。1990年代には、普通科、商業科（現・総合学科）、衛生看護科（現・看護科）の3学科合わせて、生徒数約2000人の大規模校だった。しかし、少子化や共学校人気などの影響で、次第に生徒数が減少し、2000年代の初めには1200人程度となっていた。06年度に赴任した芳野敬三校長は、当時の状況をこう語る。

「大規模校だった頃は、各学科がよい意味で競争意識を持ち、切磋琢磨する雰囲気がありました。しかし、生徒数が少なくなると、そのような雰囲気は徐々になくなり、3学科が連携し、学校としての一体感を高める必要がありました。それでも現状を検証せず、同じ教育を続けていたことが課題でした」

状況を打開するため、同校がまず着手したのは、客観的に生徒の学力を把握することだった。「教師一人ひとりが学校全体を見渡す視点を持つために、学科を超えて生徒の学力を測る共通の指標が必要でした。生徒の学力をきちんと把握することが、課題に対応した教育内容、指導体制を構築する第一歩になると考えたのです」（芳野校長）

同校は、07年度、ベネッセの「基礎力診断テスト」(\*1)を導入した。結果は進学科が取りまとめ、各学科のGTZ(\*2)を過年度や学科・コース間で比較できるようにした。当初、看護科は導入をためらっていたが、他学科のデータを見て学力把握の必要性を感じ、翌年から同テストを実施。Dゾーンの生徒の数が明らかに増え、漠然と感じていた学力低下が浮き彫りになった。これで、全学科で教師が学力を切り口にした生徒の実態について議論できる環境が整った。

08年度には、年間進路指導計画の作成に着手



聖カタリナ学園高校校長  
**芳野敬三** よしの・けいぞう  
教職歴41年。同校に赴任して11年目。「信望・愛・生徒の力を信じ、生徒の成長を望み、生徒に愛情を持って接する」



聖カタリナ学園高校教頭  
**横山博文** よこやま・ひろふみ  
教職歴25年。同校に赴任して26年目。総合学科長兼任。「思いを形にするには勇気がいる。教師に必要なのは言葉に出す勇気、行動する勇気」



聖カタリナ学園高校  
**平原澄夫** ひらはら・すみお  
教職歴21年。同校に赴任して22年目。普通科長、英語科主任、ICTグローバル教育推進責任者。「常にスピード感を大切にして職務にあたる」



聖カタリナ学園高校  
**國本優香里** くにもと・ゆかり  
教職歴3年。同校に赴任して4年目。国際教育室ICT推進委員。「様々なことに挑戦しようとする生徒をしっかり支えられる存在でありたい」

した。横山博文教頭はその意義をこう語る。

「本校では、進路指導は担任に任ざれており、進路行事や進路学習の体系的なカリキュラムがなかったため、よい取り組みがあっても次の学年に継承されにくい状況でした。進路指導を体系化することで、どの時期に何をすべきかが一目で分かるようになり、教師の進路指導への意識が大きくなりました」

同校の進路指導の特徴は、高校での学習・生活に対する意識調査の結果をグラフにした「生徒の意欲曲線」を参考に、生徒の学習意欲が下がる時期に進路行事を配置していることだ。例えば、体育祭後の1年生9月には、文理選択を見据えた進路研究を行い、気持ちを引き締める。2年生12月の期末考査後には、大学の個別相談会を実施し、生徒の意識を受験へと切り替えられるようにしている。教師が他学科の様子も把握できるように、3学科の取り組みを1枚のシートにまとめた点も工夫の1つだ。

## 確認テストと補習で基礎・基本の定着を図る

「基礎力診断テスト」の結果から、国語・数学・英語の基礎学力向上が課題であることが明らかになり、09年度、「総合的な学習の時間」で学び直しに着手した。教材は、1年目は教科担当者が作成した小テストを用いたが、作問や結果

分析の負担が大きかったため、2年目からベネッセの「マナトレ」(\*3)を採用した。

「『マナトレ』で、生徒の自学自習による学び直しのスタイルが確立しました。しかし、事後の復習も生徒に任せていたため、生徒のつまずきを担任と教科担当者が把握しきれず、フォローが不十分でした」(横山教頭)そこで、12年度の総合学科設置を機に、「マナトレ」を活用した基礎学力向上策を改善した。まず、「マナトレ」の級ごとに確認テストを実施。合格点に達しなかった生徒には、土曜補習に参加させることにした。補習では、生徒は教科担当者から解説を受けた後、補習プリントに取り組み。これは、教科担当者が「マナトレ」の級に準じて問題の難易度を設定して作成したプリントだ。生徒は、その補習プリントを理解できるようにするまで指導を受け、スモールステップでの弱点克服に努める。

補習の各教室には教科担当者や担任が付き、チーム・ティーチングで生徒個々に丁寧に指導する。実施後、教科担当者が出席状況や解説した内容、生徒の取り組みの様子などを「マナトレ確認テスト 実施報告書」(P.36図)に書き込み、担任に渡す。担任はこれを見て、生徒の学習状況をつかみ、課題があれば教科担当者と対策を立てる。そうした結果、「マナトレ」のどの級の確認テストでも、合格率が8割を超えるようになり、D3の生徒が急激に減少したという。

\*1 GTZ (学習到達ゾーン) という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性(自我同一性)を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。\*2 学力到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」の15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。\*3 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

図 「マナトレ確認テスト 実施報告書」

期 日	期 数	レベ ル	期 間	審 査 員		
実施日	6/4		200分	校長岡田君		
出席生徒数(30名) (再試不合格者は赤)						
G1	7	17	22	23	26	32
G2	5	12	14	19	27	28
G3	11	22	23	24		
G4	11	24				
G5	5	11	19	22		
G6	17	26				
G7	6	12	14	16	25	34
G8	26					
欠席生徒数(3名) (無届け欠席者は赤)						
G1						
G2						
G3						
G4						
G5	27					
G6	7					
G7						
G8	11					
【使用教材】						
マナトレ数学8教科おわりプリント、練習プリント・再試						
【実施報告】						
自作した補講用プリントを配布し、前巻と類と題の大きく3つに分けてポイントと解説した後、教員3人で軌跡演習を行なった。補習になった生徒の多くが、模や漢での小取組の得意であったため、主体のポイント解説だけで問題なら解けるようになり生徒も多かった。小取組の苦手意識の強い生徒や小取組の得意について不安がる生徒については、軌跡演習で教員が個別に解説している、改善がみられた。補習の不合格者に対しては、8教科おわりプリントを課題として与え、月曜日に提出するように指導した。また、欠席者に対しても再試不合格者と同様の課題を与え、月曜日に提出するように指導した。						

毎時間の情報共有で 指導の質の担保を図る

総合学科設置については、若手教師を中心とする各教科の代表、管理職から成る「カタリナ24委員会」で議論した。当時の学科構成は、就職希望者の多い商業科がある一方、普通科の中にも就職に対応する総合進学コースがあり、各学科・コースのすみ分けが明確ではなかった。

「開校以来の伝統のある商業科の改組には、ためらいがありました。しかし、3学科の中で、商業科の受験者数が最も減っているのも事実でした。伝統ある商業教育や普通科総合進学コースの福祉系科目など、多様な教育資産を生かすためには、総合学科の設置が最良であるという結論に達しました」(横山教頭)

補習での生徒の学習状況を担任に報告し、その後の指導に生かす。  
\*学校資料をそのまま掲載

康福祉など7系列)の研究を行った。

授業前には学年団で、授業ごとに作成する指導案を基にミーティングを行い、授業後は振り返りを行う。「この部分の説明が足りず、生徒の気づきを促せなかった」「前向きな気持ちを引き出す声かけが不十分だった」など、次の授業に向けた目線合わせを行う。

「効果的だった点、不十分だった点を共有し、検討するなど、足並みをそろえることは、学年団の一体感を醸成すると同時に、指導力を高めるためにも欠かせません」(横山教頭) 総合学科の担任を経験した國本優香里先生は、次のように語る。

「『自分にはできない』『やりたいことが見つからない』という生徒も少なくありません。総合学科を受け持つ際は、生徒に自信を持たせ、前向きに進路を切り開いていく力を引き

出すことを意識しています。学年団での情報共有は、生徒への声かけの内容や課題の取り組ませ方など、ほかの先生の指導を知ることができる貴重な場になりました」

教育のICT化を組織的に進め、教育力の向上を目指す

15年度、同校は創立90周年を迎え、100周年に向けた新たな改革に乗り出した。柱の1つは、16年度の共学化(看護科は除く)に向けた環境整備だ。管理職と各分掌の代表による「カタリナ28委員会」を設置し、全国の先進校を視察して共学化に向けたノウハウの蓄積に努めた。もう1つは、魅力ある授業づくりのための教育のICT化だ。15年3月、普通科長の平原澄夫先生が学校の意思決定機関である運営委員会(委員長は芳野校長)に、普通科でのICT教育の実施を提案。10日ほどでベネッセの「Classi」(\*2)の導入が決定し、4月下旬の職員会議で公表され、6月にはタブレットが整備された。

「学校改革にはスピード感が大切です。16年度の生徒募集に向けて、ICT化のメリットを正確に伝えるためには、ただ『やります』と言うだけではなく、前年度中に校内に浸透させておく必要がありました」(平原先生) 教師全員にICT教育の浸透を図るため、校内研修の体制も工夫した。ICTに精通してい

\*1 ベネッセの教材の1つ。生徒一人ひとりの視野を広げ、将来の進路について考えるきっかけを与える教材。  
\*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

る教師5人をICT推進委員に任命し、さらに、教科指導推進チームとClassi推進チームを結成した。各教科1人、計13人による教科指導推進チームは、授業のICT化の状況把握、デジタル教材の活用事例の研究などを行った。Classi推進チームは、全学年団から7人を選出し、「Classi」を活用した学習指導や生徒把握、情報共有などの方法を探った。ICT推進委員が研修の計画・運営と両チームの取りまとめを行い、研修で両チームが検証の成果を報告した。

「ICTの研究授業には40人近くの教師が参加するなど、どの教師も積極的に取り組んでいます。あと数年で定年退職というベテラン教師も含め、全体の半数以上の教師がICTを活用した授業を行っています。多忙感はあるかもしれませんが、学校が地域から注目を集めていることに対してやりがいを感じているのではないですか」（平原先生）

## 「Team T28・W28」で 成績上位層を伸ばす集団づくり

共学化を迎えた16年度、新校舎が竣工した。60年前に校地が分かれて以来、再び全学科が1つの敷地に集まり、設備面でも学校の一体感を担保する環境が整った。

普通科の特別進学コース（2年次に特進アカデミックコースか特進国際コースを選択）では、

新たな活動が始動した。成績上位層の育成を目指す「Team T28」「Team W28」だ。「Team T28」は、東京大学・京都大学・医学部医学科などを目指す集団づくりを目的とし、特進アカデミックコースを対象に、数学の早朝補習や進学ガイダンスなどで学力、進路意識の向上を図っている。一方、「Team W28」では、長期留学生や海外大学への進学希望者の増加を目指す。1学期のガイダンスで特別進学コースの生徒に国内大学と海外大学との違いを説明し、特進国際コースの2年生の授業では、ベネッセの「オンライン・スピーキング・トレーニング」（\*3）を導入した。これは、対話形式のトレーニングのため、リスニング力・スピー

キング力の向上が期待できる。今後の特別進学コースでは、「Classi」のグループ機能を使って、さらに集団力を高めたいという。

同校への地域の期待と評価は高まっている。16年度入試の受験者数は前年比の2倍となり、入学者も200人以上増え、男子1期生の入学者は目標を大幅に超える107人に達した。改革の成果を実感しながらも、同校に慢心はない。

「改革は進行中です。今は過去の成果を振り返るよりも、スピード感を持って走り続けていくことが大切です。課題は、成績上位層の生徒を安定的に確保すること。教育の質、教師の指導力のさらなる向上に努めて、校外にアピールしたいと思います」（平原先生）

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 生徒とともに 夢を探す存在でありたい

国際教育室、ICT推進委員 國本優香里

着任3年目の2015年度に、校内のICT教育を取りまとめるICT推進委員に選出されました。教職経験の浅い私に、ICT化のかじ取り役が務まるのかという不安もありましたが、学校に貢献したいという思いもあり、引き受けました。普段は教科指導や生徒指導の面でアドバイスをいただいているベテランの先生方から、デジタル教材や「Classi」の使い方について質問されることが多くなり、頼りにしていただけることにやりがいを感じています。

本校には、自信があまりない生徒が多いと感じています。進路学習に取り組んだ時には、どうすれば夢を持てるようになるのか、背中を押してあげることができるのかということを第一に考えました。「進路ノート」に「どうせ自分なんて」というコメントを書く生徒には、前向きに自分自身を見つめられるように、様々な角度から問いかけました。生徒が書いた感想や決意表明に、1人20分くらいかけてコメントを書いたこともあります。

16年度には、「Team T28・W28」など新たな取り組みが始まりました。成績上位層の生徒たちが難関大学に合格できるしっかりとした指導力を身につけることが、現在の目標です。私は比較的、生徒と年齢が近く、身近な存在だと思うので、生徒とできるだけたくさん話し、彼らの悩みを受け止め、一緒に夢を探し続けていきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年10月号指導変革の軌跡「石川県・私立北陸学院中学・高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

\*3 インターネットのテレビ電話を使い、ネイティブスピーカーと1対1で英会話の練習を行う、ベネッセが提供するサービス。